平和をつくる国際人材開発機構のすすめ

岩　村　　昇*
神戸大学医学部医学研究国際交流センター

International Human Resource Institute for World Peace Development

Noboru IWAMURA**
Kobe University

* 広島大学平和科学研究センター客員研究員
** Affiliated researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

宇宙船地球号の乗組員の75パーセントは発展途上国の都市の下町及びスラム更にその背景にある疲弊した農漁村に住んで居り，そうした草の根の人達の生命を蝕む疾病は，下痢腸炎で体力を落し，簡単な風邪ひきで肺炎に至り，遂には結核で死亡するというからまりが，死亡原因の上位を占めて居る。[1)]

しかも発展途上国の結核は，若壮年層を倒し，家庭を，村を，そして国の民を，貧困と結核の悪循環の鎖で，しばり，とらえ，草の根の人達が自立出来ないようにしてしまう，社会病である。

繁栄と平和は両立しない

「"着たい，見たい，食べたい"，更には"知りたい"の知識欲も含めた"たい，たい，づくし，欲望追求の力学"で経済が動き，その欲望追求の経済の力学は，とっくに国境を越え，その国際経済の力で国際政治がゆれ動く，一国が自分の考えで国策を進めて行くことが出来なくなった。」

「西の陣営が，発展途上国に国際協力を入れれば入れる程，都市の一部が繁栄し，近代化の光が当る部分で一部の富める者か益々富み，そのかげで，多数の草の根の人達が益々貧しくなる，ビルの立ち並ぶ繁栄のかげでスラムか拡がり，その背景にある農漁村が益々疲弊して行く。その社会不安が政治不安になり，そこへ東の陣営が干渉し，更に西の陣営が，という大国の介入により，遂には戦争になってしまうというのが，最近の戦争のパターンである。」

発展途上国の現場で，国際協力の第一線で働いて居られる，医学以外の農学，工学，経済学，政治学を実践する農業，工業，金融，行政の欧米，最近は日本人専門家の声を，此の20年余り，直接間接にきかせていただく中から，医者の端くれである自分の役割は何か？と問いつづけて今日に至った。

草の根の人達の参加無くして草の根の開発無く，草の根の開発無くして草の根の生活向上無く，草の根の生活向上無くして草の根の健康無く，草の根の健康無くして草の根の光無く，草の根の光無くして闇は去らず，闇去らずして平和来らず。

「光は闇に勝って居る。」

"発展途上国のスラム及びその背景にある農漁村のコミュニテイで，農林水産業を改良普及し，協同組合を運営し，村の健康保険制度をつくり，コミュニテイに根ざした健康づくりで，草の根の疾病の75パーセントは草の根レベルで予防および治療出来たのである!!"[2)]

そのような，発展途上国農漁村の綜合的地域開発 Comprehensive Rural Community Development の中での健康計画，即ち，コミュニテイづくりの中での健康づくりCommunity based Health Development が，発展途上国の農漁村のほんの一部の極く小さな範囲であるが成功しつつある。成功とは，草の根の人達が自立しつつある，自立を失いかけ平和が失われそうな兆しがみえて居たのが，自立を取り戻して平和を獲得したという事実をいう!![3)]

平和をつくる人をつくらねばならぬ!!

私は，広島市千田町二丁目に在った当時の広島高等工業，現在の広島大学工学部の前身に在学中，1945年8月6日に被爆し，「多くの友人を失い，死んで行く人達の傍で何をすることも出来ず，自分だけが生き残った」ので，更めて医学の道を志し，今日に至った者である。

その私が，最近数多の学会の中で最も学ぶことが多かったのは，1983年の春に大阪で催された医学総会での"国際医療協力セミナー"，続いて夏に京都でもたれた第15回医学教育学会での"国際性と独創性のある医師をどうしてつくるか？のパネルディスカッション"[4)]，そうして"国際医学，医療・保健協力シムポジウム"[5)]である。何れも，WHOのいうプライマリー・ヘルスケアー[6)]を発展途上国の現場で実践する人材養成を志向して居る。

そこで国際人材開発機構 International Human Resource Institute for World Peace Developmentの発足をおすすめしたい。

即ち，発展途上国のComprehensive Rural Community Development を担う人材を，卒後研修機構の中で養成訓練するのである。

具体的には，発展途上国を志す若き医師，農業専門家等が，現地の気候風土，歴史，文化，言語等，自分の専門以外について，出来れば現地と日本を往復して事前研修する。

此を実現する為に，諸賢の御指導をいただきたい。

文　　献

1) Dr. Mauris King : *Medical Care in the Developing Countries*, Oxford University Press, 1st Ed. 1962－10th Ed. 1982

2) Kenneth W. Newell : *Health by the People*, WHO 1975

3) 岩村昇：共に生きるために－アジアの医療と平和，新教出版社，第２版　1983

4) 京都大学医学部長：第15回日本医学教育学会記録医学教育学会事務局，近刊予定

5) 国際医療シンポジウム組織委員会：第１回国際医学医療保健協力シンポジウム記録，京都大学医学部泌尿器科学教室，近刊予定

6) The Director-General of the World Health Organization and The Executive Director of the United Nations Children's Fund : "Primary Health Care", WHO, Geneva, 1978